



筑紫女学園大学リポジット

戦前期の八幡市長と市政構造 —八幡市長銓衡過程の分析を中心に—

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 筑紫女学園大学 人間文化研究所 公開日: 2024-12-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 時里, 奉明 メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/2000031

戦前期の八幡市長と市政構造

—八幡市長銓衡過程の分析を中心に—

時 里 奉 明

The Mayors of Yahata and the Municipal Structure Before World War II: Analysis of the Process by which the Mayors were Selected

Noriaki TOKISATO

はじめに

本稿は、戦前期における八幡市長銓衡過程の分析を通して、八幡市の市政構造を明らかにすることを目的とする。

日本の近代都市史研究において、東京、大阪など大都市の政治史研究は多彩な成果を積み重ねているが、中小都市、さらには地方都市の政治史研究はあまり進んでいない。¹ そうした状況で、軍港都市の横須賀市を対象に、市長の銓衡過程を通して市政構造を明らかにした研究が見られる。² 市長の選任方法を簡単に説明すると、市会が3人の候補者を内相に推薦する方法から、市会の選挙で決定する方法へと変わっている。どちらにしても、市長の推薦や選挙は、市会が決定的な役割を果たすため、政治的な対立や妥協が起こりやすかった。それゆえ、市長銓衡過程は市政を分析する重要な対象の一つと言ってよい。しかしながら、先行研究は市長銓衡過程そのものを詳細に論じてはいないので、各政党間の対立や妥協のあり方は、よくわかっていない。そのため、市長と各政党の関係が明らかではない。

以上をふまえて、筆者は個々の八幡市長の銓衡過程を詳細に分析する。その際、製鐵所および政党の動向に注目したい。八幡市は官営製鐵所の設立により、一寒村から大都市へと変貌した典型的な企業都市である。製鐵所はその市政に大きな影響力を行使したとされる。とすると、市会を構成する各政党は、製鐵所といかなる関係をもったのだろうか。しかし、その実態はほとんどわかって

いない。このように、企業と政党に注目して、市長銓衡過程を分析することは、八幡市の市政構造を明らかにするとともに、企業と地域政治の関係を理解する重要な手がかりになるだろう。

本稿は次の諸点を課題とする。第一に、市制に規定された市長選任方法を説明する。第二に、八幡市長を大牟田市長と比較しながら、その特徴を指摘する。第三に、市長銓衡時における市会の政治構造をふまえて、個々の市長銓衡過程を明らかにする。最終的に、八幡市の市政構造の特徴とその変遷を解明することにした。

第一章 戦前期の八幡市長

第一節 市長選任方法

市政を規定するのは、1888年に制定された市制である。³ 市制はその後、1911年、26年、29年、43年の4回改正された。1888年の市制によると、市政は市長と助役の執行部、市会議員で構成される市会、市長・助役・名誉職参事会員により構成される市参事会で運営されることになっている。市参事会は、市を統括し、固有の行政事務を担当している。名誉職参事会員は1911年の改正から、市会で市会議員のなかから選出されることになった。こうして、名誉職参事会員は市会議員の有力者が選出されるようになり、市長と市会の調整にあたった。

市制は同時に公布された町村制とは異なる特徴をもつ。その一つが、市長の選任方法である。市長は内相が市会の推薦した3人の候補者のなかから選び、天皇の裁可を経て決定する。任期は6年であった。1911年の改正で4年となっている。一方、町村長は町村会において、公民のなかから選挙し、任期は4年であった。市長の選任方法は、1926年の改正により、市会の選挙となり、内相への推薦はなくなった。しかし、1943年の改正で、再び市会と内相による選任方法となっている。

市会議員は、公民による3等級制の市会議員選挙で選出され、任期は6年で3年ごとに半数を改選した。1911年の改正により、任期4年で全員改選となり、続いて21年の改正により、公民の納税要件は市税だけとなり、2等級制の市会議員選挙に変わっている。1926年の改正は、前年の衆議院議員選挙法の全文改正（普通選挙法）に対応して、等級制と納税制限を撤廃し、普通選挙を採用している。市会は市会議員で構成され、条例の制定権、予算・決算の議決、吏員の選挙などのほか、市長を推薦する権限をもち、市政の中心を担っている。

市長銓衡は、市会に各政党の有力な市会議員から構成される銓衡委員会を設置して進められる。銓衡委員会は、各政党から推薦された候補者について協議し、候補者の出馬を要請して、本人から承諾を得る。市会は銓衡委員会が推薦した候補者について、第一から第三まで、それぞれ投票して計3人を決定する。このあと、市会議長が内相に上申し、最終的に天皇の裁可を経て決定する。この銓衡方法は、1926年の改正で市会の選挙となり、内相に上申する必要はなくなっている。つまり、市長銓衡はより民主的な方法に変わっているが、各政党の駆け引きはむしろ激しくなっている。このように、市長銓衡は市会の有力議員および政党の間で、政治的な対立や妥協が起こ

りやすい仕組みになっているといつてよい。市会は市長を銓衡する重要な機能をもつとともに、そのこと自体が最大の争点となることも多かつた。つまり、市会を構成する政党にとって、自らに都合のよい市長をいかに確保するかは、市会を思う通りに運営するために不可欠であったといえよう。

第二節 八幡市長の特徴

表1と表2は、八幡市ならびに大牟田市の歴代市長について、就任と退任の年月日、在任年月、交代日数、交代理由、経歴について記載している。大牟田市は、八幡市と同時に市制を施行し、

表1 八幡市歴代市長

歴代	氏名	就任年月日	退任年月日	在任年月	交代日数	交代理由	経歴
1	末広直方	1917年 7月19日	1918年 9月5日	1年2ヵ月	-	病気のため 辞表提出	鹿児島県出身/警視庁、内務官僚、高知県・岩手県・香川県の知事、函館区長、小倉市長
2	堀口助治	1918年 11月18日	1921年 12月12日	3年1ヵ月	74日	辞表提出	宮崎県出身/内務官僚、栃木県・福岡県・熊本県の内務部長、福島県知事
3	永井環	1922年 1月25日	1926年 1月24日	4年	44日	任期満了、 再選なし	福井県出身/判事、内務官僚、宮崎県知事、門司市長、東京市助役、(福井市長)
4	新開滌観	1926年 3月17日	1927年 5月10日	1年2ヵ月	52日	病気のため 辞表提出	熊本県出身/内務官僚、宮崎県・岩手県・愛知県の警察部長、石川県内務部長、(小田原町長)、(日立市長)
5	二木千年	1927年 7月11日	1928年 1月19日	6ヵ月	62日	病気のため 辞表提出	長野県出身/内務官僚、佐賀県・滋賀県の警察部長、釧路市長、愛知県・神奈川県の書記官・内務部長
6	図師兼次	1928年 6月21日	1942年 4月9日	13年10ヵ月	154日	衆議院議員 選挙のため 辞表提出	宮崎県出身/農商務官僚、林務官、山林事務官、林務課長
7	内田隆	1942年 11月22日	1946年 11月21日	4年	227日	任期満了	宮城県出身/台湾総督府事務官・殖産局長、秋田県知事、野村林業株式会社専務取締役

出典：『福岡日日新聞』、『門司新報』、『大阪毎日新聞北九州版』、『八幡市史 統編』 1959年より作成。

注：経歴の（ ）は、八幡市長退任後の職歴。

表2 大牟田市歴代市長

歴代	氏名	就任年月日	退任年月日	在任年月	交代日数	履歴
1	巖谷忠順	1917年7月3日	1921年7月2日	4年		福岡県出身/佐賀県松浦郡長、大牟田町長
2	岩井敬太郎	1922年3月23日	1929年8月10日	7年4ヵ月	264日	長崎県出身/内務官僚、韓国統監府の警視・書記官、青森県・長崎県・神奈川県の内務部長、(平戸町長)
3	奥村長作	1929年11月23日	1933年11月22日	4年	105日	新潟県出身/土木監督署技師、内務技師、鉄道院技師
4	前田慎吾	1934年5月4日	1937年12月4日	3年7ヵ月	163日	鹿児島県出身/内務官僚、青島守備軍民政部事務官、愛知県産業部長、岐阜県・岩手県の内務部長
5	田中修	1938年1月23日	1946年1月22日	8年	57日	福岡県出身/内務官僚、鹿児島県内務部長、長野県内務部長

出典：『日本の歴代市長』第三巻1985年、『日本官僚制総合事典：1868-2000』2001年、より作成。

注：経歴の（ ）は、大牟田市長退任後の職歴。

また八幡市と同じく大企業（三井三池炭鉱）をかかえている。このように、大牟田市は八幡市と性格が似ているので、比較する対象として妥当であろう。

1917年から46年までの同期間で、八幡市は7人、大牟田市は5人の市長が歴任している。市長の在任期間をみると、八幡市は平均3.96年に対し、大牟田市は平均4.98年であり、約1年違う。なお、八幡市は函師市長を除くと、市長6人の平均は2.31年まで下がる。八幡市長は、任期4年を全うすることが少なく、短命であった。また、市長交代の日数をみると、八幡市は平均約102日であるのに対し、大牟田市は平均約147日である。八幡市の場合、二木市長就任までの交代日数は1ヵ月半から2ヵ月半であったが、函師市長就任に5ヵ月を要し、急に長くなっている。その交代理由をみてみると、辞表を提出した市長が5人、そのうち病気を理由とする市長が3人となっている。とくに、新開、二木の両市長は在任期間が短いうえ、病気を理由に辞職している。新開市長から函師市長の間に、政争が複雑で激しくなり、簡単に調整がつかなくなったことを予想させる。さらに、市長の経歴をみてみると、両市とも内務官僚出身が多いが、八幡市長は県知事経験者4人を数えるのに対し、大牟田市長は皆無である。八幡市長の要件として、地方自治体の総合的な行政経験を求められたと言えるだろう。とすると、函師は地方自治体の行政経験は皆無でありながら、在任期間13年10ヵ月と長期化したことは興味深い。

表3は、八幡市長就任時の製鐵所長官、支持勢力、対立勢力を整理している。本論で説明する

表3 八幡市長と政治勢力

歴代	氏名	経歴	製鐵所長官/所長(市長就任時)	支持勢力	対立勢力
1	末広直方	鹿児島県出身/警視庁、内務官僚、高知県・岩手県・香川県の知事、函館区長、小倉市長	押川則吉：鹿児島県出身、山形県・大分県・長野県・岩手県・熊本県の知事、農商務次官、内務次官、貴族院議員	政友会	第二候補：田島勝太郎（市会議長）、第三候補：宇野哲夫（助役）
2	堀口助治	宮崎県出身/内務官僚、栃木県・福岡県・熊本県の内務部長、福岡県知事	白仁武：福岡県出身、栃木県知事、関東都督府民政長官、内閣拓殖局長官	政友会	第二候補：田島勝太郎（市会議長）、第三候補：宇野哲夫（助役）
3	永井環	福井県出身/判事、内務官僚、宮崎県知事、門司市長、東京市助役	中井勲作：熊本県出身、農商務次官、日本製鐵株式会社社長	政友会	—
4	新開滌観	熊本県出身/内務官僚、宮崎県・岩手県・愛知県の警察部長、石川県内務部長	同	政友会	憲政会・民憲党、第二候補：定行八郎（憲・市会議長）、第三候補：芳賀善之助（政・市会副議長）
5	二木千年	長野県出身/内務官僚、佐賀県・滋賀県の警察部長、釧路市長、愛知県・神奈川県書記官・内務部長	同	憲政会	政友会・民憲党、芳賀種義（政）、古市春彦（民憲）
6	函師兼武	宮崎県出身/農商務官僚、林務官、山林事務官、林務課長	同	市政公新会	民憲党
7	内田隆	宮城県出身/台湾総督府事務官・殖産局長、秋田県知事、野村林業株式会社専務取締役	渋沢正雄：東京都出身、第一銀行ほか重役を歴任、日本製鐵株式会社常務取締役 景山齊：鳥根県出身、関西鉄道、製鐵所の工作課長・工務部長・鋼材部長・技師長	—	—

出典：『福岡日日新聞』、『門司新報』、『大阪毎日新聞北九州版』、『八幡市史 続編』1959年、『日本の歴代市長』第一巻1983年・第二巻1984年、『新編日本の歴代知事』1991年、『日本官僚制総合事典：1868-2000』2001年より作成。

が、製鐵所長官は市長を推薦する絶大な権限をもっていた。というより、市会は後任市長の推薦を、ほとんどの場合で製鐵所長官に依頼していた。それゆえ、製鐵所長官は市会の要望を聞きながら、あらゆる人脈を使って、市長を推薦していたことがわかる。市会は当初、政友会が優勢であったので、製鐵所と政友会の関係が続き、市長銓衡は円滑に進んでいる。しかし、大正の終わりごろから、憲政会（民政党）が台頭して政友会と拮抗し、市長銓衡をめぐる抗争が激しくなる。さらに、無産政党が台頭したことをきっかけに、既成政党は市会で多数派を形成し、市長銓衡は新たな仕組みへ移行する。その後、市会は政友会、民政党、無産政党の三つ巴状態となっている。

以上をふまえて、表4の八幡市会議員の政党別推移をみておこう。1917年、21年は政友会が過半数を確保し、市会で優位な時期である。1925年は政友会と憲政会が拮抗し、市会で両勢力が均衡している。1929年、33年、37年は無産政党が躍進し、市会で政友会・民政党・無産政党（民憲党系と社会民衆党系）の勢力が均衡している。そして、どの市会構造のなかで、個々の八幡市長は選任されたのかを組み合わせてみた。その結果は、次の通りである。

①政友会優勢期－第1代末広・第2代堀口・第3代永井

②政友会・憲政会均衡期－第4代新開・第5代二木・第6代函師（一期）

③政友会・民政党・無産政党均衡期－第6代函師（二期～四期）・第7代内田

以下、この組み合わせにもとづき、八幡市長の銓衡過程を説明する。

表4 八幡市会議員の政党別推移

選挙年		1917年	1921年	1925年	1929年	1933年	1937年
議員定数		36	36	36	36	40	44
政党	政友会	19	18	15	10	13	7
	憲政会（民政党）	8	11	15	12	14	10
	中立	3	4	1	0	0	5
	製鐵所職員	6	3	1	0	0	6
	民憲党系	－	－	4	5	5	5
	社会民衆党系	－	－	－	9	4	9
	国民同盟	－	－	－	－	4	－
	その他（養生・愛政）	－	－	－	－	－	2

出典：『門司新報』1917年5月4日、1925年5月3日、『福岡日日新聞』1921年5月3日、
『大阪毎日新聞 北九州版』1925年3月9日・10日、29年5月2日、33年5月2日、37年6月3日より作成。

- 注：(1) 憲政会は、1927年6月立憲民政党に改組している。
 (2) 九州民憲党は、1925年4月に結党、26年2月民憲党と改称、29年9月日本大衆党八幡支部、30年8月全国大衆党八幡支部、31年7月全国労農大衆党八幡支部と変わる。1932年7月に社会大衆党が結党されたあと、社大党旧労大と名乗る。1937年4月に社大党を離脱し、日本無産党に合流する。
 (3) 社会民衆党八幡支部は、1928年1月に成立した。1932年7月に社会大衆党が結党されたあと、社大党旧社民と名乗る。
 (4) 1942年の市会議員選挙は、政党解散後であるので、対象から外した。

第二章 政友会優勢期

第一節 第1代末広直方

八幡市は1917年3月1日に発足している。当時の八幡町長は末広直方であり、そのまま市長臨時代理者に任命されている。各級の市会議員選挙が実施され、36人全員が確定したのは5月2日であった。それから約1ヵ月後の6月4日に市会を開催、銓衡委員9人を選出し、市長を銓衡することになった。銓衡委員会は新たな人物を希望する委員と末広の続投を支持する委員とに別れたが、押川則吉製鐵所長官および服部漸製鐵所次長は末広を推したという。そもそも、末広町長は当時の銓衡委員が町長の推薦を押川製鐵所長官に依頼して実現している。こうした経緯から考えると、押川製鐵所長官の意思に反する選択はなかったといっていよう。7月4日の市会で、第一候補末弘直方、第二候補田島勝太郎、第三候補宇野哲夫を推薦することを満場一致で決定し、19日に末弘市長が認可された。こうして、製鐵所長官の意思にもとづき、市制最初の市長として末広が就任している。⁴ 末広市長は1918年春から病氣静養中であつたが、8月21日に辞表を内相に提出、9月5日に許可されている。その在任期間は、1年2ヵ月であつた。⁵

第二節 第2代堀口助治

1918年9月16日に、市会は銓衡委員9人を選出した。⁶ 9月19日に銓衡委員会を開催、そのあと白仁武製鐵所長官を訪問している。⁷ 白仁製鐵所長官は、「決して八幡市の市長選挙などには干渉がましきことは為さざるも、委員諸氏が市長の人物を物色する上に於ては、出来得る限りの便宜を与ふことは躊躇せず、随つて紹介若くは意思の取次は辞せざる」と答えている。⁸ 9月25日、銓衡委員会は候補者のリストアップに難航したため、谷口留五郎福岡県知事に推薦を依頼することになった。⁹ 10月9日、銓衡委員会後に、再び白仁製鐵所長官を訪れている。¹⁰

10月18日に銓衡委員3人が上京し、委員間で第一候補とした堀口助治に承諾をもらい、11月3日に帰幡している。¹¹ このプロセスを説明しておこう。最初に、銓衡委員は堀口の同期生たちに、その人となりを探ねたところ、「皆同氏の人物を賞賛せざるはない」という返答だったという。堀口は1900年に東京帝国大学法科大学政治学科を卒業している。銓衡委員が探ねたのは、おそらく大学の同期生であろう。銓衡委員は、白仁製鐵所長官に堀口について相談したところ、「大に賛成」し、小橋一太内務次官を紹介している。小橋内務次官は、堀口について「其れは最も好い人物だと思ふ」が、「未だ年が若いから或は官界にも希望がありはしないかと思ふ」ので、「其の友人としては貴族院柳田書記官長が最も懇意だから一応氏にお会ひなすつたが好からう」と銓衡委員にアドバイスしている。小橋内務次官が仲介した「貴族院柳田書記官長」とは、日本民俗学の創始者として知られた柳田国男であった。銓衡委員は柳田貴族院書記官長と会見し、「同氏から御照会下さつた結果、略承諾を得たといふ事」を聞いている。そこで、銓衡委員は堀口の自宅を訪問し、本人から承諾を得ている。おそらく、谷口福岡県知事および白仁製鐵所長官から推薦してもらった市長候補者のなかに、堀口助治が含まれていたであろう。こうして、11月5日に市会

を開催、第一候補堀口助治、第二候補田島勝太郎、第三候補宇野哲夫を決議した。¹² 堀口が正式に八幡市長に就任したのは、11月18日である。

さて、堀口市長が辞任を表明したのは、1921年11月であった。八幡市長に就任して、ちょうど3年を迎えたころである。市長の任期は4年であるので、任期満了まであと1年を残している。堀口市長は、どうして任期途中で辞任を決意したのだろうか。筆者は堀口助治市長と宇野哲夫助役の両者で専断的に市政運営を進めたため、市会議員の反発を招いたことに最大の原因があるのではないかと考えている。

1921年3月1日、市当局は午後の市会に選挙区制案を提出する予定であった。この議案は市制第16条にもとづき、三級選挙で選出される市会議員12人は、八幡市内を枝光方面・大蔵方面・尾倉方面に三分割して実施するという内容であった。ところが、当日の午前で開催された市民大会に約800人が参加し、入江八郎を議長として、市当局不信任を決議している。さらに、約400人が市会議場に押し寄せたため、市会を開会できずに流会となってしまう。市当局は翌日に市会を開会しようとするが、前日と同じく午前市民大会が開かれ、そのあと約600人が市会議場に押し寄せる事態となった。そこで、堀口市長は市民代表者と協議の結果、選挙区制案は取り下げることになっている。¹³

八幡市は1921年4月、つまり翌月に市会議員選挙を控えていた。選挙区制案は、この市会議員選挙に間に合わせようとしたのであろう。また、市民大会の議長を務めた入江八郎は、八幡市政界における憲政会の重鎮であり、市会議員であった。一方、堀口市長は政友会びいきでよく知られた人物である。¹⁴ 入江はこの選挙区制案が可決されると、憲政会は不利になると考え、市民大会を挙行して圧力をかけたのであろう。

さらに、堀口市長辞任の理由として、1921年7月31日に任期満了を迎えた宇野助役を再任できなかったことがあげられる。そもそも、宇野助役は再任が有力とされていた。8月9日、堀口市長は宇野助役再任を市会に提案し、承認されている。¹⁵ ところが、ほぼ1ヵ月過ぎた9月12日の市会において、宇野の助役辞退の申し出を承認している。¹⁶ それでは、急ぎ他の助役候補者を銓衡するかというと、そうではなかった。『福岡日日新聞』は、その事情をある市会議員からの情報として、次のように伝えている。

現在の市長の任期が後一ヶ年位であり、到底現市長を再任する意思はないからして、急に助役を置く必要があるならば、先づ市長の退職を乞ふた上に根本からの大立直しを断行し、課長なども同時に新人物を入れたいと云つて居る（中略）此の助役問題は市長の問題と同時に解決を計るに到るもの¹⁷

つまり、堀口市長の任期はあと一年であり、再任する意思はないので、早急に助役を置く必要はないという。堀口市長は宇野助役を失ったうえ、市会議員が市長に再任する意思はないことを感じたので、任期を満了せずに辞任したのであろう。11月19日、堀口市長は尾倉山切取問題で東京、解決の見通しがついたため、正式に辞任した。¹⁸

第三節 第3代永井環

堀口市長辞任の直後から、市長候補者として永井環の名前が噂されていた。¹⁹ 11月24日に市会を開催、銓衡委員8人を選出している。²⁰ そして、12月に大和生太郎（市会議長）ら銓衡委員が上京、白仁製鐵所長官の紹介で永井環と交渉し、承諾を得ている。12月27日の市会で、第一候補永井環、第二候補大和生太郎、第三候補洪田實を決定している。²¹ 永井市長が正式に就任したのは、翌1922年1月25日であった。この間、堀口市長の辞任から永井市長の就任まで、わずか1ヵ月半であった。早い時期から、市会一致で後任探しを始めていたのであろう。

永井市長は1926年1月24日に在任4年となり、任期満了を迎えている。1月29日の市会において、銓衡委員12人を選出して、まず永井再選を協議している。²² その内訳は、政友会5人（芳賀善之助〔市会副議長〕・白石彌壯・波多野幸次郎・諸岡甚太郎・狭間呈作）、憲政会5人（定行八郎〔市会議長〕・上田吉次・入江八郎・原田次郎平・小苗治之助）、製鐵所1人（内海幸太郎）、民憲党1人（堂本為広）であった。当初は永井市長の再任が有力とされていた。政友会、憲政会の両党とも永井市長継続の意向であり、両党の市会議員を合計すると、市会議員の83%を占めるので、再選は確実な状況であった。ところが、永井市長は、無産政党员員に対し、密かに再選運動を行ったとされ、両党の感情を損ねたという。²³

1925年4月の市会議員選挙において、地方無産政党である九州民憲党（翌年2月に民憲党と改称）の候補者4人は全員上位で当選した。また民憲党は、政友会、憲政会の市会議員数が拮抗したため、市会議決のいわばキャスティングボードを握っている。²⁴ 永井市長は無産政党に理解があるとされ、民憲党は永井市長再選を支持していた。民憲党の母胎である労働組合同志会は、1月19日に永井市長再選の建白書を定行市会議長に提出している。²⁵ 政友会、憲政会両党はこういう状況を考慮して、永井市長継続を断念し、新たな市長候補者を探すことになったと思われる。

第三章 政友会・憲政会均衡期

第一節 第4代新開滌観

政友会の市会議員であった大塚與三郎によると、芳賀銓衡委員から市長候補者を尋ねられたので、岩田勇五郎八幡警察署長から聞いていた元石川県内務部長の新開滌観を推したという。芳賀ら銓衡委員7人は2月11日に上京し、安達謙蔵らの推薦により、新開の承諾を得て帰幡している。²⁶ 安達は非政友会系の大物政治家であり、当時衆議院議員であった。しかし、大塚と芳賀は政友会に属しており、新開も政友会系であるので、ライバルである憲政会の安達による推薦というのは疑問である。その一方、『門司新報』によると、新開は中井勳作製鐵所長官の推薦により市長に就任したと伝えている。²⁷

民憲党は2月28日に新開氏反対永井氏再選を要求する市民大会演説会を開催し、決議文を可決し、さらに銓衡委員12人を戸別訪問し、辞職を勧告することを決議している。²⁸ 3月1日、民憲党演説会に800余人が集まり、党員が次々に登壇して「上京委員が推薦した新開滌観氏は自治制に何

等経験の無い人である」「我等は労働者に好意を寄せ労働運動に理解を持つて居る永井前市長の再選を希望す」と主張している。続いて、市民大会を開催し、新開に対し市長辞退勧告文を送ることを決定している。²⁹

市会は3月2日に開会し、新開諦観を八幡市長に推薦することを決議した。民憲党議員4人は、この推薦に反対し、市会議場を退場している。³⁰ 同日、同志会および民憲党の共同開催で市民大会を開催し、新開の市長就任反対を決議している。³¹ このように、民憲党は既成政党による市長の交替に強く反対している。

ところで、新開市長は1927年5月7日、病気を理由に辞意を表明している。1926年3月17日に就任しているので、1年と2ヵ月も経っていない。新開市長はそもそも政友会系であり、政友会と極端に親密だったため、民憲党だけでなく、憲政会や中立の反発をまねき、1927年度予算は大幅な修正を余儀なくされ、気分を害していた。その後、制限外課税認可および砲兵工廠移転問題のために上京したが、病気を悪化させ、市長の任務に堪えきれなくなったという。新開市長は黒崎町合併や上水道敷設の問題を解決したが、1927年度予算編成で市会議員と打ち合わせず、市会多数派との関係に円満を欠き、中井製鐵所長官に辞意をもらしていた。³² 市会は5月10日に新開市長の辞任を承認した。³³

第二節 第5代二木千年

後任の市長候補者をめぐって、政党間で駆け引きが行われている。『門司新報』によると、市民は八幡市の重要懸案（九州製鋼買収、砲兵工廠誘致、遠賀郡上津役村合併など）を解決するため、輸入市長は絶対不可であり、郷土市長を要望していると伝えている。³⁴ この要望は、市民としているが、政友会の主張そのものであると言ってよい。また、憲政会と民憲党は、新開市長排斥で一致していたが、後任候補者では提携せず、どちらも中立を巻き込んで争っているという。³⁵ また、製鐵所は「今後市長の推薦はせぬ方針」と表明していた。³⁶ これは中井製鐵所長官の意向と考えていいだろう。

1927年5月19日に市会を開会、銓衡委員17人を選定している。その内訳は、憲政会6人（定行八郎〔市会議長〕・百田善作・安部久太郎・中村仁太郎・野上文雄・疋田兵之助）、政友会6人（芳賀善之助〔市会副議長〕・大塚與三郎・綾部弥太郎・山本東樹・白石彌壯・望月康太郎）、民憲党2人（亀岡長太郎・堂本為広）、中立3人（高島弥八郎・井上円蔵・岡田良吉）であった。³⁷ 5月24日に第1回銓衡委員会を開催、定行・芳賀・堂本・山本・百田・岡田の6人を選出して小委員会を設置し、斎藤守岡福岡県知事および中井製鐵所長官に意向を聞くことになった。³⁸

6月15日の銓衡委員会において、政友会は芳賀種義、民政党は三松武夫を推薦している。³⁹ 芳賀は製鐵所誘致の功労者であり、その後県議員、市議員を歴任し、政友会八幡支会長を務めている郷土の名士であった。民憲党は翌16日、参加者400人を集めて演説会を開催し、輸入市長反対を主張している。民憲党は「無産政党の立場から各都市の大部分が官吏の古手を市長に担ぎ込む傾向あるを極度に嫌ひ（中略）郷土市長説を持論」としていた。⁴⁰ しかし、民憲党は政友会が推す

芳賀を支援することはなく、郷土市長の持論を曲げて、輸入市長を推薦することになる。6月18日に銚衡委員会を開催、民政党は三松武夫を撤回、新たに二木千年を推薦することになった。⁴¹ 民憲党は18日に幹部会を開き、古市春彦前京都帝国大学教授を推薦することに決定した。⁴² 民憲党は元大学教員であり、既成政党の市長候補者とは異なる経歴をもつ人物を推薦したと言えよう。なお、中井製鐵所長官はこの問題が紛糾した場合、斡旋の労をとるとしている。⁴³

6月24日に銚衡委員会を開催、政友会は芳賀、民政党は二木、民憲党は古市をそれぞれ市長候補者として市会に推薦することになった。6月30日の市会において、市長候補者3人について投票した結果、二木21票・芳賀16票・古市3票（計40票）となった。⁴⁴ 1925年の市会議員選挙は、政友会および憲政会とも15人当選で同数であった。1927年3月に板櫃町槻田および黒崎町の合併にともなう市会議員増員選挙を実施し、6人を選出している。つまり、市会議員定数は1925年の当選者36人と合わせて42人になっていた。⁴⁵ その増員選挙の当選者と中立者が、二木に投票したことになっている。この結果に対し、堂本議員（民憲党）は、「我々の反対した二木千年に対して民憲党は今後絶対に反対する」と宣言している。⁴⁶ このように、投票結果は僅差であるので、二木市長の支持基盤は不安定であり、その前途は多難であることが予想された。その事情を『大阪毎日新聞 北九州版』は、次のように述べている。

二木新市長の腕だめしは中井製鐵所長官と、開き直つて水道問題にひつかゝつた沼田部長にウンといはせる大役である、助成金増額問題、購買会対策など製鐵所との交渉複雑を極めやうとする時、奇襲的な新市長と、理屈づくめの製鐵所の折合がうまくゆかゞ疑問、それにしてもまして厄介なのは市会のやりくり、微妙といへば微妙、『全力をあげて反対』する民憲の階級党争意識、『反対のため』反対する政友のうつぶん、絶対多数を夢見た新開前市長も街頭に立ちそこなつたものだ、いはんや市会分野の色彩は必ずしも民政に有利ではない⁴⁷

二木市長は7月21日の着任会見で、「中央に於ては政党はあるが、市政には絶対に党派は不必要」と述べ、党派抗争を牽制した。⁴⁸ 民憲党は同日、二木市長反対宣伝ビラ数万枚を市中に配布し、翌日二木市長反対演説会を開催している。⁴⁹ 二木市長は続いて、道路の改善、公営事業で財源確保、公会堂の建設、市役所の人員および組織の改編を目標とすることを表明している。⁵⁰

9月9日に二木市長就任後、最初の市会が開催された。しかし、二木市長が冒頭で所信表明を述べると、それを堂本議員（民憲党）が皮肉ったことをきっかけに激論となり、また西尾倉切取跡地処分が進んでいないことを波多野・大塚の両議員（政友会）が追求したのに対し、星野土木課長が反論するなど、議場は混乱している。⁵¹ 二木市長は10月に南牟禮税務課主任の不祥事により、加来税務課長、瀬川社会課長を更迭している。両課長とも政友会系であった。⁵² 加来税務課長は部下である南牟禮税務課主任の不祥事を他に転化したという。民政党系の二木市長による、政友会系の市職員への圧迫と受け取られている。⁵³

10月26日の市会は、混乱を極めている。西尾倉切取跡地の一部を入江賢助八幡劇場取締役に提供する議案は、芳賀議員（政友会）から会社を代表していないとの疑義が出て市会は紛糾し、結局保留となっている。⁵⁴ 入江議員は製鐵所構内運搬人組合幹事であり、1925年の市会議員選挙で初

当選した民政党（当時は憲政会）の実力者であった。続いて、二木市長が1918年の米騒動において、細民救済の目的で篤志家の寄付により設立された八幡救済事業準備金を育英事業資金に振り替えることを提案している。ところが、政友会および民憲党の激しい質疑に対し、二木市長が喧嘩腰で対応し、混乱に拍車をかけている。翌27日、政友会と民憲党の有志による八幡市政刷新既成同盟会が二木市長弾劾の市民大会を開催したところ、参加者は約1000人に達した。市民大会は決議文と辞職勧告書を可決し、実行委員9人を選出して、当日二木市長に手渡している。⁵⁵

このあと、二木市長は上水道敷設実施設計認可、西尾倉切取工事費起債借替などの陳情のため東京で3週間奔走し、11月21日に帰幡、そのまま市制10周年記念祝賀会で謝辞を述べている。ところが、翌日から病を癒やすため、別府で静養することになった。⁵⁶ その後、二木市長の容態は悪化したので、12月7日に横浜の医者にもてもらうために東上することになり、市長辞任は時間の問題となっている。⁵⁷

1928年1月16日に二木市長の辞表が定行市会議長に届き、19日に市会は辞職を承認した。⁵⁸ 市長に就任して約6ヵ月、実質約4ヵ月の在任であった。なお、二木は3月10日に死去している。1日25日の市会において、後任市長は「簡単に決定出来ぬ」とし、次回の市会へ持ち越しとなった。⁵⁹ 約4週間後の2月20日に普通選挙初の衆議院議員選挙が控えていることも影響したであろう。そして、その選挙結果は八幡市政界に大きな変化をもたらすことになる。

第三節 第6代凶師兼式（一期）

1928年3月9日、八幡市の政友会と民政党は「市政公新会」の創立総会を開催し、両党提携して市政にあたることになった。同年2月20日の衆議院議員選挙において、福岡県第2区（若松市・八幡市・戸畑市・遠賀郡・鞍手郡・嘉穂郡）は、無産政党的の浅原健三（民憲党）と亀井貫一郎（社会民衆党）が1位、2位を占めている。全体の得票率は、浅原が22.3%、亀井が13.5%、計35.8%であった。とくに、両者は八幡市を地盤とし、その得票率はそれぞれ33.1%、19.8%、計52.9%を記録している。⁶⁰ この結果は、約1年後に迫った市会議員選挙において、無産政党的の躍進を予想させるのに十分であった。政友会と民政党、いわゆる既成政党的の危機感は高まった。衆議院議員選挙から1週間もたたずして、『福岡日日新聞』に次の記事が掲載されている。

市長選挙は新開・二木両市長選挙で政民両派が激烈な抗争を続け、これが市民迄に累をなし、両市長とも遂に任期半にて党争の犠牲になり辞職したことは八幡市民に大なる不幸であり、目下上水道敷設の重大なる計画を有して居る折柄、政民両派は一致して優秀なる人物を後任市長に据へ市会の円満を期すべきであると云ふ意見が各派間に相当根強く台頭して居る⁶¹

つまり、新開・二木両市長は、政民両派の抗争により短命に終わったので、政民両派一致して後任市長を迎える必要があることを説いている。なかでも、民政党は上田吉次、政友会は大塚與三郎を中心に両派の提携が進んでいる。⁶² 大塚は民政党的の原田次郎平に説き、別府で政民両派市会議員の懇親会を開いている。その席上で、「政党的の觀念を棄てて市政の上には政民両派結束してこれに当たらねばならぬということに意見一致」している。要するに、市政公新会は「既成政党的の

大同団結であり、無産政党に一線を画した反無産党陣営」であった。⁶³

さて、3月23日の市会において、銓衡委員9人を選出し、翌24日に第1回銓衡委員会を開いている。その内訳は、民政党4人（定行八郎〔市会議長〕・上田吉次・原田次郎平・小苗治之助）、政友会3人（波多野幸次郎・白石久雄・大塚興三郎）、民憲党1人（亀岡長太郎）、中立1人（井手口興市）であった。そこで、第一に八幡市に適当な人物、第二にいかなる方面に求めるか、第三にいかにして満場一致とするか、について協議し、時間をかけてもよいので、最適者を選ぶことを申し合わせた。⁶⁴ 第一については、郷土市長、猿野子之吉助役昇格、輸入市長の3つのうち、輸入市長を有力としている。⁶⁵ 第2回銓衡委員会は4月10日に開催、市長推薦を中井製鐵所長官に一任することを決定している。⁶⁶ 政民両党の抗争により、市政を円満に運営することができないうえ、何度も市長の辞任を引き起こしたことを反省し、全会一致で良き市長を選出することになり、中井製鐵所長官に市長の推薦を依頼することになった。⁶⁷

中井製鐵所長官は5月19日に定行銓衡委員長、21日に銓衡委員と会見し、第一に建設的手腕あり、かつ意思堅固にして人格者であること、第二に経歴を重視しないことを表明し、今週中に市長候補者を推薦するとした。⁶⁸ ところが、中井製鐵所長官は5月26日に定行銓衡委員長と会見し、市長を推薦する予定であったが、まだ具体化していないという理由で、しばらく先送りになった。⁶⁹ このごろ、中井製鐵所長官は市長候補者について、次のように語っている。

第一政党臭味なきこと、及僕自身が八幡の事情を承知して居る関係上単に市長としての適任者を求むる意味でなく、真に八幡市の市政を運行するに最も適切な人物を探查して居る訳だ、随つて交渉人物の範囲も極めて狭く僕自身で先ず其人物手腕を十分呑み込み安心して推薦し得る人士に向つて交渉して居る⁷⁰

中井製鐵所長官が、川久保製鐵所総務部長同席のもと、市長候補者を銓衡委員に対して正式に発表したのは、6月9日であった。その市長候補者は、元農商務事務官で宮崎県東臼杵郡北浦村に在住している函師兼式であった。⁷¹ 6月11日に銓衡委員会を開催、翌12日銓衡委員は函師と別府で会見し、承諾を得ている。⁷² 銓衡委員は函師に対し、「市長就任の上は八幡市議員選挙区制を設定すること」「公新会の主義政策を取り入れ市政の運行に当たること」の2点を、承諾の条件にしたという。⁷³ 中井製鐵所長官は函師について、「銓衡委員会の注文である不偏不党、且相当手腕を有し、加ふるに健康体の人として最も適任者と信じ推薦したまでだ、無論僕とは二十年来の交友でどんなことにも容易に腹を立てず、又常識の非常に発達した人で総てに理解を有つてをる人物」と評価したが、⁷⁴ 「市長としての経験なくその方の手腕は未知数である」とも指摘していた。⁷⁵

中井製鐵所長官は5月21日に市長推薦者を今週中に公表すると明言していたにもかかわらず、6月9日までなぜ2週間も遅れたのだろうか。当初、中井製鐵所長官の意中の人物は、猿野助役であった。ところが、中井製鐵所長官は「市会各派の空気が助役承認では円満に行かないことを看破」し、「急に他に候補者を物色」したので、公表が遅れたという。⁷⁶ この決定に対し、堂本議員（民憲党）は「階級的立場を異にする函師氏の就任に真向から反対」と表明した。⁷⁷ また、井本・百田・綾部・飯野ら急進派議員が、銓衡委員の独断的行動を糾弾し、市政公新会で内紛が起

こっている。しかし、市会の市長選挙では、同一行動をとることで収まったようである。⁷⁸ 6月19日の市会で投票の結果、函師を市長に選出した。総数35票中、函師33票・猿野1票・白票1票であった（4人欠席）。⁷⁹

ここで、中井と函師の関係について、説明しておこう。両者は1904年の文官高等試験で合格した54人の仲間であった。さらに、両者は農商務省に同時に入省した7人のなかに含まれている。つまり、中井と函師は、農商務省入省の同期生であり、お互いによく知った間柄であった。

最近、発見された函師兼式の日記を紹介しておこう。函師の日記によると、函師は4月から中井と連絡が密になっている。続いて、5月中旬から6月上旬の日記から、中井と関係のある記載をあげておこう。

五月十三日 発信。製鐵所中井長官（延岡着日時打診ノ件）

五月十四日 発信 中井製鐵所長官

六月 二日 来電 中井閣下「明夜別府中山旅館ニ投宿一泊、是迄御出ヲ待ツ」
返電、病気都合ニ付御伺出来ズ。云々料金（六十錢也）

六月 四日 発信 午前中井長官

六月 五日 来信 中井閣下（用件市長問題）

返電 中井氏宛（文拝見、考慮致マス、「民」○○）（○は解読不能）

六月 九日 夕方中井長官ヨリ来電 明日上京前会見をシタシトノコトニ付山下善作ヲ備ヒ市銀ニ行ク

この間、中井と函師が直接会った記述はなく、電報や手紙のやり取りで、函師は内諾したようである。函師は6月10日に八幡に出向き、中井製鐵所長官の官舎で製鐵所の野田技監、川久保総務部長、佐々木理事らと夕食をとっている。その夜は、佐々木理事宅で過ごしたあと、翌日再び中井製鐵所長官と会っている。⁸⁰ その後、函師は別府へ移動し、銓衡委員と会っている。このあと、函師は四期13年10ヶ月にわたり、八幡市長を続けることになる。

第四章 政友会・民政党・無産政党均衡期

第一節 第6代函師兼式（二期～四期）

函師は1932年6月に任期を満了する状況になった。同年6月3日、市政公新会は正副議長ほか11人で協議会を開催、「函師市長は在任中幾多の功績をあげ、手腕経綸は申分なく将来大事業を控へ、これが遂行には同市長が適任者であるとの見地から、満場一致再選に決定」している。⁸¹ 6月8日の市会で、銓衡委員11人を選出している。⁸² その内訳は、政友会4人（波多野幸次郎・高山定光・梶野政吉・中村彦吉）、民政党3人（上田吉次・野上丈雄・小島勝太郎）、社会民衆党（社民党）3人（安日新・横大路茂・濱橋文作）、不明1人であった。全国労農大衆党（労大党、民憲党の後継）の銓衡委員が皆無なのは、注目してよい。翌日、銓衡委員会は函師市長に対し税外収入拡大、市長勤務時間励行、綱紀肅正、市吏員採用公平を注文し、さらに社民党は小選挙区制撤廃

を強く要望したうえで、満場一致で再選を決議している。⁸³ 6月10日に市会を開催、投票の結果、凶師兼武25票、安部磯雄3票で凶師再選を可決した。凶師再選を支持したのは、市政公新会、社民党であり、反対したのは労大党であった。社民党と労大党は、どちらも無産政党であるが、凶師の再選をめぐる態度が別れている。この市会で、堂本議員（労大党）は小選挙区制撤廃は無産政党の要求である、なぜ凶師市長を推すのかと問うと、横大路議員（社民党）は市政に大過なく善処している、小選挙区制は市長の責任ではなく多数党の責任であると答えている。それに対し、堂本議員は小選挙区制は市長が提案していると反論し、両党の対立が続いている。⁸⁴

続いて、凶師三選のプロセスについて説明する。1936年5月ごろ、凶師三選について、政友会の白石久雄、民政党の上田吉次は、最近数回会見して市政公新会の態度を申し合わせ、さらに白石は渡辺義介製鐵所長と会見、その意向を質したとされている。市政公新会は三選を希望しているが、無理に引き止めはしないという態度であった。凶師は1935年秋に辞意を漏らしていたという。⁸⁵ 民政党は4人、政友会は5人を各派交渉委員として選出し、小会派委員と協議し、各派一致で凶師三選を求めることを計画している。⁸⁶ 6月4日、社大党旧労大（労大党の後継）執行委員会では、凶師三選を協議した結果、「凶師市長は希に見る有能の市長であるが、すでに在任八年におよんであるので、今回の任期満了に際し強ひて留任勧告はせぬ」という方針を決めた。⁸⁷ 6月9日に各派交渉委員会を開催したが、意見が一致することはなく、散会している。しかし、『福岡日日新聞』によると、凶師は「已に市長としての試験済みであり、後任市長を物色するにしても現市長以上の人物を得ることは中々困難」であり、「関係深き日鐵方面においても中井社長、渡辺製鐵所長等は極力三選を希望してゐる」ので、凶師を三度推薦することになるだろうと予想している。⁸⁸ 6月11日に各派代表者が協議した結果、三選に難色を見せていた小会派と市政公新会の意見が一致したので、各派代表者は凶師市長と会見、市会で三選を決議した場合は、承諾することを要望している。⁸⁹ 凶師は翌12日にその要望を受け入れたので、13日に市会を開催し、銓衡委員11人による委員会を開いて凶師を推薦したところ、満場一致で可決された。凶師は市長三選の挨拶において、五市合併の実現を果たすという意欲を示している。⁹⁰

最後に、凶師四選のプロセスを説明する。1940年6月4日、市会協議会は凶師四選を満場一致で決議し、凶師に要請している。市長の任期は、6月20日までであった。⁹¹ 凶師は6日に「一身上の都合」「八幡市将来を思へば潮時」という理由で辞退したので、翌7日緊急各派交渉委員会を開催、凶師の翻意を要請することにした。⁹² しかし、凶師は委員会の再三の要請に応じることはなかった。そこで、山本東樹・安田新正副市会議長が出馬し、6月13日に要請したが、凶師に固持され、断念している。⁹³ こうして、凶師は6月20日に任期満了で市長を退任した。同時に市会は銓衡委員14人を決定している。もし凶師を市長候補者としないうち、渡辺製鐵所長に人選を依頼することにしたという。⁹⁴

6月27日に銓衡委員会を開催、凶師兼武前八幡市長、大塚俊一八幡市助役、守田道隆前八幡市土木課長、田中廣太郎前内務省官僚などを候補者とし、「人格識見高潔にして行政的手腕、市政に通曉すること、対内対外に人望と大八幡市長としての貫禄を有すること」を条件として、四時間

あまり協議した結果、函師に再出馬を要請することに決定している。⁹⁵ この決定に、遠賀郡折尾町は、合併にはずみがつくと歓迎している。折尾町は八幡市西部に接し、同市との合併協議が進んでいた。⁹⁶ 7月1日に詮衡委員14人は延岡で函師と会見、函師は近親者や友人と相談して回答すると返事している。⁹⁷ 翌2日、函師は「詮衡委員の熱心な懇請に老骨も顧みず白紙で一切をお任せしました、駄馬に鞭ち一層八幡市発展のため全力をあげ市民のご好意に酬いたい」と述べ、四選を承諾した。渡辺製鐵所長は、函師を「過去十二年間にわたりその椅子にありすでに名市長として親しまれ、まれにみる円満滑脱八幡市の育ての親であるとともに功労者」と賞賛した。また中村商工会議所会頭は、函師に「教育、土木はもとより公会堂の建設、臨港線施設とともに関門トンネル開通による八幡駅の改築など躍進途上にある八幡としてなすべき事案は多数」であり、「大八幡建設百年の大計」を立てることを期待した。⁹⁸ 7月10日に市会は満場一致で函師市長の四選を決議した。堂本議員（日本無産党、社大党旧労大の後継）のみ、推薦方法に問題ありとして退席している。函師は「当市のため貢献せんと一身一家の都合を超越して就任をおひきうけたもの」と挨拶し、折尾町合併、畑貯水池問題が当面の課題であることを表明した。⁹⁹

第二節 第7代内田隆

こうして、函師は八幡市長四期目を迎えたが、2年もたたずして市長を辞任することになった。1942年4月5日、翼賛政治体制協議会推薦候補者詮衡特別委員会は福岡県第2区の推薦候補者に函師を決定している。函師は8日に市会の承認を得て、翌9日に立候補した。¹⁰⁰ そして、4月30日に実施された第21回衆議院議員選挙で当選している。¹⁰¹

ところで、市会が市長の詮衡委員、正副市会議長を含め10人を決定したのは、7月9日であった。¹⁰² 八幡市は6月15日に市会議員選挙を控えていて、それまで2ヵ月あまりと短かいうえ、選挙後は市会議員の顔ぶれが変わるので、先送りにしたのであろう。7月20日に第1回詮衡委員会を開催し、市長候補者の条件を「本市の特殊事情に理解を持ち、壮年期の人で意気と信念に燃え、行政手腕のある人物」と申し合わせた。¹⁰³ 8月1日の詮衡委員会は「まだ候補者を外部へ発表までに至らず、一同は製鐵所に梶本次長を訪問し市長詮衡に協力方を依頼」している。¹⁰⁴ 梶本金平製鐵所次長は8月8日に上京、渋澤正雄製鐵所長、日鐵本社幹部と協力し、有力候補者と懇談、10日に山本東樹詮衡委員長（市会議長）ほか数人が上京し、交渉を開始することになった。¹⁰⁵ 詮衡委員は8月21日に平生夙三郎前日本製鐵株式会社社長や安川第五郎らの紹介で、第一候補者の安井誠一郎に市長就任を要請したが、家庭の事情で東京を離れることができないとの返答であった。そこで、松本健次郎を通して再交渉することにし、それでも辞退する場合は、渋澤製鐵所長に第二候補者の推薦を一任することになったという。¹⁰⁶

ところが、9月4日の詮衡委員会および市会協議会において、安井の推薦は不成功に終わったこと、内務省に人選を依頼し先輩と協力して適当な人物を推薦してもらうこと、山本詮衡委員長単独で上京し推薦することを報告している。¹⁰⁷ 山本詮衡委員長は9月22日の詮衡委員会で、山崎巖内務次官を中心とする在京の人物に協力を求めながら詮衡していることを報告している。¹⁰⁸ 続

いて10月17日、銓衡委員4人が上京しているが、難航しているのは明らかであった。ようやく、内田隆に内定したのは11月16日であった。7月から後任市長の銓衡に入って、6人目の候補者であった。台湾時代に総務部長だった後藤文夫、山崎内務次官との間でまとまり、安川らも賛成したという。¹⁰⁹ 11月21日、市会は満場一致で内田隆を市長に承認した。¹¹⁰ 内田は4年の任期を全うし、1946年11月21日に退任している。¹¹¹

おわりに

本稿をまとめて、さらに今後の展望を述べたい。

戦前期における八幡市長の銓衡過程の特徴として、2点をあげることができる。一つは、ほとんどの場合で、製鐵所長官の推薦により八幡市長が実現していることである。市会に有力な市会議員を構成員とする銓衡委員会が設置され、候補者の推薦が行われるが、その過程ではほぼ製鐵所長官に人選を依頼している。製鐵所長官が人選に関わらなかったのは、おそらく第5代二木市長だけであろう。この前後は、政友会優位の市会構造が変化し、政友会と憲政会の勢力が拮抗したときであった。第6代函師市長から、再び製鐵所長官に人選を依頼するようになる。つまり、八幡市は製鐵所と政治行政面で良好な関係を続けることを方針としたといえよう。そのことが、八幡市の現在、さらに将来にとって有益と考えたのである。

もう一つは、市長銓衡が、市政の争点になったことである。実は、第3代永井市長までは、争点にもなっていない。市会は政友会の勢力が圧倒しており、その政友会と製鐵所の間で話はついている。市長の交代日数が短いのは、その現れであろう。しかし、第4代新開市長から市長銓衡は、容易ではなくなる。市会は政友会と憲政会の両勢力が拮抗し、無産政党の民憲党も少数ながら議席を確保した。また、第4代新開市長は政友会系であり、政友会寄りの運営を行うため、市会で憲政会や民憲党の反対にあっている。その対立の頂点が、第5代二木市長時代であろう。二木市長は製鐵所長官の推薦ではなく、また民政党系であり、そのこと自体が異例であった。二木市長は市会で政友会や民憲党の激しい反対にあい、短命に終わる。さらに、八幡市は衆議院議員選挙における無産政党の躍進に直面し、既成政党である政友会や民政党の危機感が高まった。この事態に対し、政友会と民政党は両党提携して市政公新会を結成し、反無産政党の共同戦線をはった。このことは、他の都市には見られない八幡市の特徴であろう。また、市政公新会は、市会で圧倒的多数を占めているうちに、製鐵所長官に小選挙区制導入を条件として市長候補者を依頼した。すべては、無産政党対策のためである。この試みは、第6代函師市長誕生、小選挙区制導入により、ほぼ達成したといえるだろう。無産政党は市会で台頭したが、函師市長再選をめぐる、無産政党同士で仲間割れをしてしまう。こうして、既成政党と製鐵所による安定した市長銓衡、市政運営が続くことになったと思われる。

最後に、今後の展望について、二点述べておきたい。一つは、小選挙区制問題である。市政公新会が市長就任の条件とし、函師市長誕生直後に導入したことは、すでに指摘したとおりである。

これは全国的な注目を集めた出来事になっている。しかし、この導入は、相当問題であったことが指摘されている。地方自治の観点から違法とする議論も少なくない。¹¹² しかし、なぜこの小選挙区導入は認められたのか。地元の各政党の動向もふまえながら明らかにしたい。

もう一つは、函師市政の検討である。函師市政は四期にわたり、約14年間続いた。函師市長は無産政党対策をしながら、都市運営に手腕を発揮したとされている、ところが、その市政はまったく明らかになっていない。また、1920年代後半以降の八幡市政を検証するためにも不可欠である。函師市政は全国的にも評価されており、当時の地方行政について普遍的な内容をもっていると考えられる。¹¹³

以上の解明については、今後の課題としたい。

注

¹ 大石嘉一郎・金澤史男編『近代日本都市史研究 地方都市からの再構成』（日本経済評論社、2003年）。本書は水戸市・金沢市・静岡市・川崎市・川口市の各地方都市を実証的に検討している。

² 大西比呂志「戦前期の横須賀市長と市政」（『市史研究横須賀』創刊号、2002年）、同「軍港都市の市政構造—横須賀市長銓衡過程を通して—」（上山和雄編『軍港都市史研究Ⅳ』清文堂、2017年）。

³ 以下の記述は、市制の原文にもとづき、亀卦川浩『地方制度小史』（勁草書房、1962年）、都丸泰助『地方自治制度史論』（新日本出版社、1986年）、進藤兵「近代日本の都市化と地方自治の研究・序説 市長の経歴分析を素材として」（東京大学社会科学研究所『社会科学研究』46-5、1995年）を参照した。

⁴ 以上、時里奉明「八幡市の誕生」（『筑紫女学園大学人間文化研究所年報』第31号、2020年）。以後、時里前掲論文①と記す。

⁵ 『福岡日日新聞』（以下、『福日』）1918年8月23日、9月11日。

⁶ 同上、1918年9月17日。

⁷ 同上、1918年9月20日。

⁸ 『門司新報』（以下、『門新』）1918年9月22日。

⁹ 『福日』1918年9月27日。

¹⁰ 同上、『福日』1918年10月10日。市長銓衡に難航するなか、ある有力者は次のように発言している。「憶ふに市長など云ふ役は何処でも人気が悪いが、其れは何に因するかと云へば、市民や議員の人が共に自ら治むると云ふ態度でなくて殆ど挑戦的であるから勢い行い切れなくて、遂には漸次市長にならうと云ふ望みの人が少なくなる訳である」（『福日』1918年10月26日）。

¹¹ 以上、『福日』1918年11月4日。銓衡委員会で第三候補まで決定し、銓衡委員が上京して、交渉にあたった。

¹² 同上、1918年11月6日。

¹³ 以上、同上、1921年3月1日、3日。

¹⁴ 歴代知事編纂会編『新編 日本の歴代知事』（歴代知事編纂会、1991年）218頁。堀口は福島県知事（1915年4月～16年4月）在任中、「チャキチャキの政友会知事」であり、ライバルの憲政会を圧迫したという。

- 15 同上、1921年8月10日。宇野助役再任に、28人中6人が反対している。
- 16 同上、1921年9月13日。
- 17 同上、1921年10月8日。
- 18 同上、1921年11月21日。
- 19 同上。
- 20 同上、1921年11月26日。
- 21 同上、1921年12月28日。
- 22 同上、1926年1月30日。
- 23 以上、「大塚與三郎自叙伝(6) 一途に生きて」(『ひろば北九州』第4巻第1号、1981年)。
- 24 以上、時里奉明「戦前期八幡市の市会構造-1929年の市会議員選挙分析を中心に-」(『筑紫女学園大学研究紀要』第19号、2024年)を参照。以後、時里前掲論文②と記す。
- 25 甲斐募編『八幡製鉄所労働運動誌』(八幡製鉄株式会社八幡製鉄所、1953年)227-228頁。
- 26 前掲「大塚與三郎自叙伝(6) 一途に生きて」。
- 27 『門新』1927年5月9日。新開が市長の辞任を表明したときに、就任の経緯を説明している。
- 28 『福日』1926年3月1日。
- 29 『福日』1926年3月3日。
- 30 同上、1926年3月3日。3月2日の市会において、堂本議員は「八幡市の如き労働都市には飽く迄此点に理解ある有能の士を迎へなければならぬ」と新開の市長就任に反対している。
- 31 以上、甲斐前掲書、228-229頁。
- 32 以上、『福日』1927年5月9日。
- 33 『門新』1927年5月11日。
- 34 同上、1927年5月12日。
- 35 『福日』1927年5月19日。
- 36 『大阪毎日新聞 北九州版』(以下、『大毎』)1927年5月12日。
- 37 『福日』1927年5月20日。
- 38 同上、1927年5月25日。
- 39 同上、1927年6月16日。三松武夫(1876-1934)は、大分県出身。農商務官僚。鳥取、山口、新潟各県の知事を歴任。1927年4月に新潟県知事を退任していた(歴代知事編纂会編『日本の歴代知事 第一巻』歴代知事編纂会、1980年)988頁。
- 40 同上、1927年6月18日。
- 41 『門新』1927年6月19日。
- 42 同上、1927年6月20日。民憲党は最初に安部磯雄、次に賀川豊彦に打診したが、断られている。そこで、安部を通して某大学総長に市長候補者の推薦を依頼したところ、古市春彦を紹介されたという。
- 43 同上、1927年6月24日。
- 44 『福日』1927年7月1日。
- 45 以上、時里前掲論文②を参照。
- 46 『福日』1927年7月1日。
- 47 『大毎』1927年7月20日。製鐵所土木部長の沼田尚徳は、1921年から八幡市の上水道敷設に尽力して

いたが、上水道が政争の対象となったため、水道顧問の辞退を申し出ている（『福日』1927年7月7日）。

48 『門新』1927年7月22日。

49 同上、1927年7月23日。

50 同上、1927年7月27日。

51 『福日』1927年9月10日。

52 『門新』1927年10月18日。

53 同上、1927年10月18日、19日、20日。

54 同上、1927年10月27日、『福日』1927年10月27日。

55 以上、『大毎』1927年10月28日、『福日』1927年10月28日。

56 『門新』1927年11月22日、24日。

57 『大毎』1927年12月8日。

58 『門新』1928年1月18日、20日。

59 『大毎』1928年1月26日。

60 衆議院事務局編『第16回衆議院議員総選挙一覧』1928年、483頁。時里前掲論文②を参照。

61 『福日』1928年2月26日。

62 甲斐前掲書、322-323頁、安武善広編『鉄都八幡』創刊号（カードプレス社、1958年）12-13頁。

63 以上、「大塚與三郎自叙伝（7）一途に生きて」（『ひろば北九州』第4巻第2号、1981年）。

64 以上、『大毎』1928年3月24日、25日、27日。

65 同上、1928年4月4日。

66 同上、1928年5月11日。

67 『門新』1928年5月18日。

68 以上、同上、1928年5月20日、22日。

69 『門新』1928年5月27日。

70 『福日』1928年6月3日。

71 同上、1928年6月11日、『門新』1928年6月10日。

72 『門新』1928年6月14日。

73 前掲「大塚與三郎自叙伝（7）一途に生きて」。

74 『福日』1928年6月12日。

75 『大毎』1928年6月12日。

76 『大毎』1928年6月10日。

77 『門新』1928年6月16日。

78 以上、同上、『福日』1928年6月18日。

79 『門新』1928年6月20日。

80 以上、『函師兼式日記（仮）』のうち、1927年10月27日から28年5月7日まで、1928年5月8日から12月25日まで、計2冊の日記を用いている。2024年2月25日・26日の両日、函師兼式が晩年暮らした住宅を調査した（宮崎県延岡市北浦三川内）。函師家の総合調査は、函師兼式の孫にあたる函師兼嗣氏の案内により、延岡市教育委員会文化財・市史編さん課が主体となって、実施している。筆者はその函師家の調査に同行し、おもに史料調査に協力した。函師兼式に関する史料群で、特筆すべきは日記であり、

大正から昭和戦後にかけて相当数残っているのを確認している。筆者は図師兼嗣氏のご許可を得て、先述した日記2冊を撮影させていただいた。ここに記して、感謝の意を表す。また、延岡市教育委員会文化財・市史編さん課のみなさま、とくに窓口になっていただいた岩村彩子氏に厚くお礼を申し上げたい。

81 『大毎』1932年6月5日。

82 同上、1932年6月9日。

83 同上、1932年6月10日。

84 同上、1932年6月11日。

85 同上、1936年5月25日。

86 同上、1936年5月30日。

87 同上、1936年6月6日。

88 『福日』1936年6月10日。

89 『大毎』1936年6月12日。

90 以上、同上、1936年6月13日、14日。五市は、門司市、小倉市、戸畑市、八幡市、若松市をいう。1963年に五市合併して北九州市が誕生したが、その動きは戦前からあった。詳しくは、徳本正彦『北九州市成立過程の研究 合併論・合併運動を中心として』（九州大学出版会、1991年）を参照。

91 同上、1940年6月5日。

92 同上、1940年6月8日、12日。

93 同上、1940年6月14日。

94 同上、1940年6月21日。

95 同上、1940年6月28日。

96 同上、1940年6月30日。

97 同上、1940年7月2日。

98 以上、同上、1940年7月3日。

99 以上、同上、1940年7月11日。

100 以上、『福日』1942年4月6日、9日、10日。

101 同上、1942年5月2日。

102 『大毎』1942年7月10日。

103 同上、1942年7月21日。

104 同上、1942年8月2日。

105 同上、1942年8月9日、8月11日。

106 同上、1942年8月25日。

107 同上、1942年9月5日。

108 同上、1942年9月23日。

109 同上、1942年11月17日。

110 同上、1942年11月22日。

111 八幡市史編纂委員会編『八幡市史 続編』（八幡市役所、1959年）443頁。

112 古市春彦「八幡市の小選挙区制問題に就て」（『都市問題』第7巻第5号、1928年）などの著作がある。この問題は、別稿を用意している。

¹¹³ 中井倭人『市長物語』（凡人社、1940年）は、八幡市長四期目を迎える図師の手腕を讃えている。しかし、その市政自体を論じてはいない。

（ときさと のりあき：日本語・日本文学科 教授）

